

一般選抜 A 日程本試における小論文出題意図及び解答例

国際経済学部

1. 小論文問題作成の基本的な考え方について

国際経済学部では、アドミッション・ポリシーで大学入学までに身に付けておくことが望ましい知識・能力・態度として挙げた高等学校における学力の三要素、「知識・技能」「思考力、判断力、表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に関して学力評価を行うこととしています。小論文試験は、このうち主に「思考力、判断力、表現力」として、経済社会のさまざまな動きや変化に対する探究心を有し、自らの考えを論理的に表現し、わかりやすく伝えることができることを評価することを目的としています。

2. 試験問題の内容および意図について

(内容)

本試験にて提示される問題文は、小塩隆士著『18 歳からの社会保障読本』より、序章部分の社会保障に関わる概括的な記述の一部である。

(意図)

問 1 については、社会保障制度に関して、生産活動の単位が変化したこと及び年齢間でのリスクの偏在が高齢化の進展に伴い顕在化したことにより、リスクの負担構造が変化していることを本文から読み取り、指定された字数内で記述することを求めている。

問 2 については、社会保障の充実で少子化が促進されるという前提を踏まえて、子供の数が減ることによって社会保障がうまく機能しなくなる点を、指定された語句を使い、指定された字数内で論理的に説明することを求めている。

問 3 の 1) については、表 1 から、各年における 65 歳以上人数を 15 歳から 64 歳の人数で除すこと、すなわち

$$2000 \text{ 年 } \quad 86 \div 22 = 3.9 \text{ (人)}$$

$$2020 \text{ 年 } \quad 74 \div 36 = 2.1 \text{ (人)}$$

$$2040 \text{ 年 } \quad 60 \div 39 = 1.5 \text{ (人)}$$

を正しく計算できるかを求めている。

なお、現役層の一人が支える高齢層の数を算出した解答も、趣旨は正しく理解されていることから、正答とする。すなわち、

$$2000 \text{ 年 } \quad 22 \div 86 = 0.3 \text{ (人)}$$

$$2020 \text{ 年 } \quad 36 \div 74 = 0.5 \text{ (人)}$$

2040年 $39 \div 60 = 0.7$ (人)

問3の2)については、問いで示された内容を正しく理解し、計算することができる学力を問うものである。すなわち、

まず各年齢層別の伸び率(変化率)として、

0歳から14歳 $(12-15) \div 15 \times 100 = \Delta 20.0$ (%)

15歳から64歳 $(60-74) \div 74 \times 100 = \Delta 18.9$ (%)

65歳以上 $(39-36) \div 36 \times 100 = 8.3$ (%)

となる。

次に、それぞれの絶対値を取って大きい順に並べると、0歳から14歳、15歳から64歳、65歳以上の順となる。

問4については、社会保障給付費のうち、年金費用および医療費用を抑制する方策について考えられるものを自分の言葉で具体的に示すことを求めている。解答として予想される方策については、年金については、所得額に応じた年金支給額の減額、資産額に応じた年金支給額の減額、年金支給開始年齢の引き上げ、私的年金の制度拡充による公的年金への依存軽減等が考えられる。医療については、診療報酬の引き下げ、薬価の引き下げ、高齢者の窓口負担割合の引き上げ、後発医薬品の使用促進等が解答として考えられる。

(参考)

問1 解答例

社会保障は人間が社会で直面するさまざまなリスクに備えるために作り上げてきた仕組みである。生産活動の単位が家族や地域社会から個人に移っていく過程でリスクを社会全体として担う形に変化した。リスクは年齢間で偏在することから、高齢化の進展に伴い現役層が高齢層を負担するという色彩を色濃く持つようになった。(148字)

なお、下線部が抜けていても、他の記述で埋めて字数がおおむね足りていれば正解とする。

問2 解答例

社会保障制度が充実することで、老後に子供の世話になる必要がなくなり、それが子供を持つという親の需要を低下させ、結果として子供の数の減少をもたらす。子供の数の減少は長い目で見ると高齢層に対する現役層の割合を減らすため、財源を支えるべき子供の数の減少によって社会保障がうまく機能しなくなる。(141字)